



仁衡琢磨・社長訓

仕事はおもしろがってやろう

本業で扱う研究分野は、物理学から化学、宇宙、生命科学と幅広い。
「最初は専門用語すら分からない。臆せず尋ねる、ただし聞いたことは1日で覚える。これがうちのルールです」。研究者の話す内容を深いレベルで理解できないと仕事にならないので、社員は予習と復習が欠かせないという。

その集団を率いる仁衡さんは、元文学青年という変わり種。日立市に生まれ、水戸市の高校を出て、東京の大学の文学部哲学科に進んだ。大學を中退し、アルバイト生活をして27歳の時、誘われてシステムエンジニアとして入社した。「一週間で入門書を読破して面接に臨んだ。先には「世界トップレベルの仕事」がある。

うんと思つ

特殊ソフト、研究を手助け

研究機関が集まるつくば市に本社を置く「ペンギンシステム」が手がけるのは、最先端の研究に使われる特殊なコンピューターソフト。重粒子線がん治療の患者位置決めソフトウェアや人工衛星取得データの処理システム……。大手によると、「御用聞きから始めて、開発中の仕様変更や追加にも丁寧に応じること」と仁衡琢磨社長(47)は言う。

研究者の頭の中にあるアイデアを具体化し研究活動を支援することが、自社の存在意義だと位置づける。例えば、革新的な量子ビーム検出器を作った研究者がいた。得られたデータを

カイシャの魂



ベンチャー企業用施設に入居する本社では、エンジニアらがソフト開発に取り組む=つくば市千現2丁目

ペンギンシステム

朝日新聞

2017年1月13日
第2茨城面(28)

朝日新聞社許諾番号 A16-2418

自作の簡易ソフトで手間ひまかけて分析していたが、どんなシステムがあればいいのか本人も明確な言葉にできない。要望を聞き、瞬時に結果を画面に表示する

ソフトを2年がかりで開発した。研究は加速化し、後に高名な賞を受けたと聞いた。「お手伝いした先生の成果が上がる。それが我々

の誇り」

2006年、経営が思わずしない時期に社長に就いた仁衡さんは、「第一の創業」を旗印に東京から移転を決断。「設計とプログラミングの分業が常態化するIT業界にあって、うちは両方できる『多能工』がそろっている。先端分野に集中すれば強みがいきせる」

移転から10年。役員・従業員は25人、年商約1億7千万円と経営は軌道に乗った。しかし「今は第三の創業期」と気を引き締める。

研究機関への国の交付金が減るなか、新たな事業の柱と販路が必要だ、と語る。念頭に置くのは、国の研究開発政策で重視される医療分野。医療産業都市を掲げる神戸市に新たに拠点を設け、ビジネスの種を探す。海外市場の開拓にも乗り出した。

「多能工」そろい、先端分野へ強み

一品ものの請負仕事を核に、自社製品も開発した。体の動きを撮影してお手本と比較する体育学習用ソフト「見ん者」は、筑波大との共同研究から生まれた。移転から10年。役員・従業員は25人、年商約1億7千万円と経営は軌道に乗った。しかし「今は第三の創業期」と気を引き締める。

研究機関への国の交付金が減るなか、新たな事業の柱と販路が必要だ、と語る。念頭に置くのは、国の研究開発政策で重視される医療分野。医療産業都市を掲げる神戸市に新たに拠点を設け、ビジネスの種を探す。海外市場の開拓にも乗り出した。

今後は「ものづくり」も視野に入る。あらゆる物がインターネットにつながる「IOT」の時代には、ソフトとハードの境目に革新が生まれると予感するからだ。「つくばの研究者の熱意とシーズ（技術の種）を世に出す媒介役」に出番があると確信している。

(吉田晋)